

言葉と歩く、光村の教育情報誌

とことば

2026
3号

tokotoba

特集

からだと言葉

石野由香里／生田久美子／佐伯タ利子
安田侃彫刻美術館 アルテピアッツァ美唄
恩田 陸



連載

天気と言葉とわたしたち ③

長谷部 愛

日本語と英語の行間で考える ③

キニマンス塚本ニキ

わたしをつくった言葉 ②

福田尚代 (美術家)



光村図書

教授用資料

本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。

か

だ

ら

と

言

葉

言葉を使ってからだが学ぶ。からだを使って言葉を捉える。

私たちは、からだと言葉を使いながらさまざまなことを学んでいます。

今号では、学びの場面で、からだの動きや行動は言葉によってどう変化していくのか、

身体的な学びを言葉はどう支えることができるのか、

さまざまな分野での実践を通して考えます。

教えて、からだ。わきあがる、ことば。

からだと言葉の関係性を肌で感じることはできるのでしょうか。

そんな問いに、演劇ワークショップファシリテーターの石野由香里先生がご協力くださり、「とことば」のための特別ワークショップ「教えて、からだ。わきあがる、ことば。」を開催しました。

参加者は小学校2～5年生の子どもたち。言葉をかからで表現してみたり、
からで表現したことを言葉にしてみたり――。

からだと言葉を使って遊ぶ中で、子どもたちはどのようなことを感じたのでしょうか。

撮影：足田千里

ウォーミングアップ

まずは、ウォーミングアップを兼ねて、お題「石」「火」「水」「氷」「川」などをからで表現してみます。
石野先生のかけ声とともにパッと素早くからだを動かし、言葉に反応するスイッチを刺激していきます。



石

なんか窮屈……。

石って、もしかして、動きたいって思っていない？



川

川にボールを置いておくとゆらゆら揺れるでしょ。そこから川をイメージしてみたよ。

ワーク

1

人間彫刻（お題：ときどきしちゃう場面）

お題からイメージすることをペアやグループで表現します。
「ときどき」から子どもたちが考えたのは、「注射」「告白」「テストの返却」などの場面。表現してみてどんなことを感じたか、感想を交流する場も設けます。



注射

この子、動かないかな。違うところを刺したら大変。

痛くないかな。怖いな。



自分の頭の中で想像するだけでなく、実際にやってみることで新たな気づきを得るワークです。友達と一緒に取り組むことで、自分の発想にない動きも体験します。注射する人を演じたAさんからは、「最初は、注射される側のときどきしか想像していなかったけど、もしかして、注射する人もときどきするのかもって思った」という感想が出ました。相手の立場や気持ちに想像力を働かせるきっかけを味わってもらえたのではないかと思います。（石野）

ワーク 2

好きな言葉遊び

「名詞」「オノマトペ」「情感」「せりふ」の四つのグループに分けられた言葉カードの中から、好きな言葉を選んでいきます。言葉の意味だけにとらわれず、音の響きやリズム、なんとなく気になるものなど、自由な感性で選ぶように促します。そして、選んだ言葉をからだで表現。さらに、複数の言葉を組み合わせて表現することにもチャレンジしました。

言葉選び



心表現する言葉って、こんなにあるんだね。

「つつる」の「つ」と「る」が好き。丸くてきれいな感じがする。

言葉をさまざまな角度から捉えて楽しむワークです。「○○+恥ずかしい」の○○を替えてみる遊びでは、意外な言葉の組み合わせをどうやってからだの動きで表現しようかと試行錯誤する姿が見られました。普段の自分の引き出しにはない表現にチャレンジしてもらいました。(石野)



選んだ言葉をからだで表現



こんな組み合わせもからだで表現してみよう



活動的なワークとは異なり、言葉と静かに向き合うワークです。「お母さん」の質感、手触り、重さをてのひらの中に感じます。同じ言葉でも人の心の中のイメージはそれぞれ異なることも感じながら、自分なりの表現で、丁寧に言葉を紡いでいくことができました。(石野)

ワーク 3

言葉のリレー (お題:お母さん)

全員で車座になって、「言葉」を回していきます。お題は「お母さん」。てのひらに包み込んでいる「お母さん」を隣の人へ。1周目は何も言わずに、2周目は「お母さん(自分の呼び方で)」と言いながら、3周目は「お母さん」からイメージする言葉を添えて渡します。



てのひらの中に、自分のお母さんをイメージしてね。



シュワシュワ



さやさや

ぽかぽか

ワーク 4

言葉の響きを表現しよう (お題:風)

言葉の雰囲気、音の響きなどからイメージを膨らませて、からだで表現します。「マーリエ」「エフエフ」「ルールー」「ヴィリ」ってどんな風?



激しく渦巻く風

マーリエ



穏やかな風



ヴィリ

今回のワークで使った「マーリエ」「エフエフ」などはポリネシア系の言語です。それぞれの言葉の意味を知らなくても、まるでからだが知っていたかのように感じたようです。声に出すことで言葉の力があふれ、さまざまな風を生き生きと表現してくれました。(石野)

ワーク 5

百年の握手

台本「百年の握手」(ナカガワマサヒロ(A.S.)作)をペアで演じてみます。子どもたちが演じるのは、二つの木の芽。土から顔を出したばかりの二つの芽は、離れた場所に生えているので触れ合うことができません。しかし、やがて大きな木になり、100年たったある日、ついにお互いの枝と枝が触れ合い、握手できるというストーリーです。子どもたちは、台本の前半にある「こんにちは」と、後半にある「こんにちは」のせりふを実際に言ってみます。

離れた場所から



こんにちは



枝が触れ合ったよ



石野由香里
ISHINO Yukari

演劇ワークショップファシリテーター・俳優・博士(教育学)。俳優として活動するかたわら、大学、企業、まちづくり団体など、さまざまな現場で、演劇的アプローチによるワークショップ実践・研究を行う。早稲田大学常勤講師、明星大学特任准教授などを経て、現在、早稲田大学次席研究員・日本学術振興会特別研究員。著書に『他者の発見』(早稲田大学出版部)など。

「わざ言語」から考える からだと言葉と学びの関係

からだを使って学ぶとき、言葉はどのようにからだに働きかけることができるのでしょうか。
そもそも学びにおいて、言葉とからだはどのように関わり合っているのでしょうか。
「わざ」研究の第一人者である生田久美子先生(東北大学名誉教授)にうかがいました。

「わざ言語」とは

「わざ」は、日本古来の武道・芸道の世界における、技芸の型を意味する概念ですが、伝統芸能に限らず、芸術やスポーツなど、さまざまな世界で目ざすものとして、より広い意味で「わざ」という言葉を使っています。

学校教育では言葉の学びとからだの学びが別物として扱われがちですが、本当の知識は両者が一体となって生まれるものだと思います。そのような学びが生き続けている場として、「わざ」の世界に注目しました。

さまざまな領域で「わざ」を教える指導者たちを取材すると、指導者が学習者に働きかけるときに、いわゆる科学的な言語とは異なる独特な言語が用いられていました。それが「わざ言語」です。

比喩でからだの「動き方」を伝える

「わざ言語」の役割の一つは、からだの「動き方」や「形」を効果的に伝えることです。

例えば、日本舞踏の世界で扇子を持ち上げる所作を教えるとき。「手を右上45度の角度に上げなさい」と言うこともできます。これは誰にでもわかる科学的な言語です。ですが

稽古のときには「天から舞い降りてくる雪を受けるように」という言い方をすることがあります。これは一見、所作とはまったく関係のない指示です。

弟子は「なぜ師匠はこのような言い方をするのだろう」と疑問を抱きながら、雪が降る情景を思い浮かべます。ひらひらと風に揺れながら、ゆっくりと落ちてくる雪。そっと手を差し出さないと逃げていってしまうから、手に取るには優しく手を差し伸べなければならない。こうしたイメージを通して、弟子は間接的に「師匠はこういうことが言いたかったんだ」と納得し、実感を伴った理解に至ります。

人間は、小さな子どものうちから、さまざまなことに対して「どうして?」「なんで?」を問う動物です。問い続けることは、まさに知的な営みです。「わざ」の指導者は、比喩表現を用いて学習者を問いへと導き、学習者が自分なりに考えて理解にたどり着くことを促します。このように「わざ」を学ぶときには、身体的な技能・技術の習得にとどまらず、非常に知的な営みが行われています。からだの動きも知性の一つの現れ方であり、「わざ言語」は、学ぶ者の知性に働きかける言葉なのです。

言葉にしきれない感覚を「突きつける」

「わざ言語」にはもう一つ、からだの「動き方」や「形」を超えて、自らが到達した状態の感覚を伝えようとするときに使う言葉があります。

例えば歌舞伎では「役になりきれ」とよく言います。五代目中村時蔵(現・初代中村萬壽)さんによると「その役にのめり込んでしまっていて、お客さんが目に入らない」状態だと言います。動きや形を超えた、気持ちの問題。どうすればその状態に到達できるのかは、教えることができません。

時蔵さんは、六代目中村歌右衛門のもと、『妹背山』の稽古で目の使い方を教わっているときに、「おまえさんの見てるところに世界は見えないよ」とも言われたそうです。「山の端の……」と言って、ふっと見たときの目の先で、お客さんも「ああ、あそこに山が見える」と一緒に山を見えるような、そういうイメージーションにいなわなければいけないと。

映画『国宝』では、役者がこの領域に到達するさまが描かれています。人間国宝となった歌舞伎役者の喜久雄は、この先どこへ向かうのかと記者に問われ、ずっと「景色」を探しているのだと答えます。記者はさら

に質問を重ねますが、喜久雄はうまく説明することができません。

映画のラストシーンで、喜久雄は「鷺娘」を踊りきり、万雷の拍手を浴びます。ですがその音はすぐに消え、喜久雄が身を起こすと観客の姿は忽然と消えています。雪が降りしきる舞台を見上げた喜久雄は「きれいやなあ」とつぶやく。恋に苦しむ女性の化身である鷺娘になりきり、雪の中で死んでいく、その「景色」が見えたことが最後に描かれています。この「景色」は歌右衛門が言った「世界」と同じことだと思います。

「わざ」を極めた人が到達する領域は、精確に言葉で表現することはできません。それでも伝えたいと思うとき、最後は「突きつける」しかなくなります。自らが到達した状態の、言葉にできない感覚をあえて言葉にして「突きつける」ことで、学習者自らが探っていくよういざなうのです。

実感を伴った学びのために

このように、「わざ」の学びの場における言葉は、学習者が自ら考え、自ら気づくように働きかけます。これは学校の学びにも通じることです。知性を働かせる喜びを共有することが、教育の役割だと思います。



『義経千本桜 道行初音旅』の静御前を演じる
五代目中村時蔵(現・初代中村萬壽)さん(2022年10月国立劇場)／国立劇場所蔵

子どもたちと一緒に「なんだろう」「なぜだろう」と問いかけ、一緒に考えて、それぞれが自らの答えを得ていく。それで終わりではなく、答えを得たらまたさらに、これはどうしてなんだろうと問い続ける。まさに真理の探究です。

いちばん大事なことは、共に真理に向かおうとする姿勢です。先生が一方向的に言葉だけの知識を与えるのではなく、子どもたちと共に、その学びが自分たちの生きる世界の中でどういう意味をもつのか、自分たちの生活や社会とどのようにつながっ

ているのかを、実感を伴って理解する。そのように、言葉とからだ为一体となった学びが実現できれば、子どもたちの到達状態も、先生の到達状態も、どんどん広がっていくと思います。

生田久美子 IKUTA Kumiko

東北大学名誉教授、田園調布学園大学名誉教授。専門は教育哲学、認知教育学。主な著書に『「わざ」から知る』(東京大学出版会)、『わざ言語——感覚の共有を通しての「学び」へ』(編著、慶應義塾大学出版会)がある。



「指示」から「問い」への転換 ——ビジャレアルCFの指導改革

佐伯タ利子 ビジャレアルCF サッカー指導者

指導者の言葉は、選手のプレーにどんな変化をもたらすのか、スペインのサッカークラブで選手の育成に当たるサッカー指導者の佐伯タ利子さんにお話をうかがいました。

指導者の言葉は学習源泉

私が所属する「ビジャレアルCF」は、スペインサッカーの強豪クラブの一つ。勝ち慣れた状況下、私たち指導者は自らの指導を疑わずにいました。2014年、そこへ指導改革が始まります。目的は、選手育成によるチーム強化のための、もう一段上の指導。クラブ内の全指導者120人が集まり、まず、「育てたい選手像」について1年かけて話し合いました。サッカー選手には、一瞬の状況を翻訳し、次の動きを意思決定しながらのプレーが求められます。私たちは議論を重ね、「育てたい選手像」として、①生活面も含め自律・自立した選手、②状況を総合的に理解・翻訳できる選手、③社会性を備えた選手、という三本柱を立てました。

気づいたのは、これを導く環境づくりが私たちの仕事で、私たちこそが選手の学習源泉であること。指導者の一言一句は選手の学習に影響を与えます。鍵は、Educating in Positive Language (ポジティブな言語環境の中で教えること)だと考えました。

選手主体の「問い」への転換

私たちは長く、選手の「意思」と「動き」を切り離して捉え、「動き」だけに働きかける指導をしてきました。選手は、意思を捨てて指導者の指示に従ってきたわけです。三本柱にはほど遠い指導です。

人間は、言葉を発することで考えを整理・理解します。そこで、発話の機会を設けようと、私たちは選手に「問う」ことにしました。従来の指導は、「右にパスすべき」など、「指

導者」の望むプレーに基づく「指示」。これを、「なぜ左にパスしたの？」など、「選手」の思考を引き出す「問い」へと転換するのです。

そうして指導するうち、変化が見えました。試合中、監督である私の顔色をうかがってプレーしていた選手たちが、私を見なくなったのです。集中すべきことに集中し、自ら考えるようになったのでしょう。その一方で、技術も経験もある一人の選手が、試合中に立ち尽くし、「どこで何をすべきか指示して！」と訴えてきました。意思と切り離れた指示の蓄積が、指示がないと混乱する選手を育てたのです。混乱のない順応には、段階的な転換が必要であることもわかりました。

感覚を言葉で伝える

主体的なプレーには、選手自身の「感覚」もまた大切です。私たちは、「軸足を何センチ離して蹴る」といった指導はしません。体や筋肉の使い方などは個々に違うからです。代わりに、「ゴムのようになやかに」などと言葉で伝えています。オノマトペが豊かな日本語と違い、スペイン語では難しさもありますが、重要なのは、完璧な言葉かけではなく、意識的な言葉かけ。つねに自らの言葉に自覚的であろうとしながら指導に当たっています。

佐伯タ利子 SAEKI Yuriko

1973年イラン・テヘラン生まれ。2003年スペイン男子3部リーグのプエルタ・ボニータで女性初の監督就任。その後、複数のクラブでの経験を経て、08年ビジャレアルCFと契約、男子U-19コーチや女子トップチーム監督等を歴任。18～22年Jリーグ特任理事、常勤理事、WEリーグ理事等を務める。著書に『本音で向き合う。自分を疑って進む』(竹書房)、『教えないスキル』(小学館)など。



ビジャレアル所属前、レアル・マドリードのサッカースクール指導者時代の佐伯さん。

まだ見ぬ言葉を彫り出す ——「こころを彫る授業」の取り組み

安田侃彫刻美術館 アルテピアッツァ美唄

体の動きや五感の働きは、こころや言葉とどのように結び付いているのでしょうか。石を彫ることを通して自分自身のこころと向き合い、自分を知り、感じることを目ざすワークショップの取材を通して考えます。

雄大な自然に囲まれて

閉校した小学校跡にあるこの美術館は、北海道美唄市と地元出身の彫刻家 安田侃(※)によって1992年に開館しました。広々とした丘陵地を丸ごと利用し、そこかしこで大きな石の彫刻が人々を迎えます。

その一角にある工房からは、毎月初めの土日に石を彫る音が聞こえてきます。夏は緑の敷地に机と椅子を持ち出し、鳥の声や木々のそよぎに囲まれながら、冬は真っ白な雪と石炭ストーブが燃える音に包まれながら、無心で鑿を振るう姿があります。

自分の「こころ」を彫る

このワークショップ「こころを彫る授業」が始まったのは20年前。これまでに延べ1万人以上の人々が、ここで「こころ」を彫り続けています。北海道だけでなく、全国各地から参加者が訪れ、なかには15年以上通い続けている人もいます。参加者は、イタリア産の白大理石



に、何か月もかけて自分の「こころ」を彫り出していきます。

この日が2回目という女性は、「緑の空間の中で石と向き合うのはとても楽しい。石を彫るというよりも、こころの形が彫れていく感じがします」と真剣なまなざしで石と向き合っていました。

10年以上通い、四つ目を手がける女性は、「日頃の生活を忘れ、石をぼんやり見ていたり、どうしようかと考えたりする時間がとても充実しています」と、こころのくつろぎに喜びを感じています。

「太古の昔は言葉がなく、石器をたたき割る音の響き合いが言語の起源になったという説があるそうです。ここにいと、石を彫る音で参加者の皆さんが自然とコミュニケーションを取っているように思えてきます」と、同館のスタッフで、道具の使い方などを指導している影山宏明さんは話してくれました。

五感が言葉の卵を育てる

この取り組みを始めた安田侃は、参加者たちにこんなメッセージを送っています。

「石と向かい合って、自分のこころに語りかけて、考えたことを手に伝えて、心臓の鼓動を感じながら彫ってください。石と自分の体が共鳴・



共振することで、自分を発見していく、それがこころを彫ることです」

自分の手で石に触れ、彫る音を聞き、鑿の振動を感じ、形が変わっていくさまを見るという全身を使った行為は、こころに働きかけ、思いを生み出します。それが「こころを彫る」ということなのかもしれません。

まだ言葉にならない前のこころの中の思い。それが全身の感覚を通じて大きく育っていく。思いはやがて言葉となって外に出ていくこともあるでしょう。体を使うことは、言葉の卵に栄養を与えることではないかと、参加者たちが石を彫り続けている姿を見ながら思いました。

※安田 侃(1945-) イタリアのトスカーナにアトリエを構え、大理石とブロンズによる彫刻の創作活動を行っている。東京国際フォーラムや札幌駅JRタワーなど全国各地にモニュメントが設置されているほか、世界中で数多くの作品が人々のこころに共感を与えている。

安田侃彫刻美術館
アルテピアッツァ美唄

KAN YASUDA SCULPTURE MUSEUM
ARTE PIAZZA BIBAI

広がる景色の中に置かれた彫刻が自然と一体となって息づく空間が、見る人自身のこころを映し、自分との対話ができるように設計されている。今を生きる全ての人が、無心に、自由に、思い思いの時間を過ごすための芸術広場として、多くの人が訪れる。
〒072-0831 北海道美唄市落合町栄町
「こころを彫る授業」は、毎月第1土曜・日曜の10時～16時開催(5月のみ第2土日)。

声にする

恩田 陸

小説家

ここ十年ほど、細々と続けている私の趣味は「朗読」である。読むのは、古い戯曲の翻訳や、日本の中世の説話といった古典だ。

十代の頃、初めて接した世界文学全集の最初のほうの巻は詩や戯曲だった。文学といえば小説、と思い込んでいた私は、詩や戯曲をつまらないもの感じて、それらの巻を飛ばしていた。が、大学に入り、国文科で日本の古典をおさらいして、ようやく、人間にとって、口に出して歌うもの、語るもの、それが文学だったのだ、と気付いた。何かの西洋の本に、「悪魔のように声を出さずに本を読んでいた」という、黙読を非難する一節があったのが今でも強く印象に残っている。

その後、東京で芝居を観るようになって、古典を含め、内外の戯曲に興味を持つようになった。私の読書のひとつに、「戯曲を読む」というのが新たに加わったのである。

朗読をするようになったのは、専業作家になってしばらく経ってからのことだ。家にこもって、何日も誰とも会話しないのは不健全だな、と思い、体力作りや気分転換のような位置づけで始めたのだ。「そういえば、戯曲って、本来舞台上で演じるためのものなんだよなあ」とある日突然気付き、「うちにたくさんあるし、有効活用できるじゃん」と思いついたのだ。

朗読は難しい。読み手の知性と教養がモロにむき出しになる。声にしてみても愕然とするのは、いかに黙読の際に目がすべっていたかだった。適当に読み流している漢字に、読めない字がけっこうあって、すぐに立ち往生してしまう。しかも、想像以上に体力を消耗する。10分も声を出していると、本当にゼイゼイしてしまって息が続かないのだ。おまけに、内容が重厚なものは、口に出している時の負荷がハンパない。言葉のひとつひとつがずっしり重くて、読み続けるのが精神的にしんどい。役者はすごい、と改めて思った。

同時に、よくできた台詞を語る快感に目覚めた。ヒリヒリと真に迫る台詞、音楽のような台詞を口にする時、おのずと身振り手振りを加えたくなるし、自然とその役が乗り移ってくる。黙読していた時にはついぞ感じなかった感情が、身体の中から湧きあがってくる。

驚いたのは、台詞を口にして、不意に涙ぐんでしまう瞬間がしばしば訪れたことだ。大昔の、翻訳された台詞であっても胸が詰まって、自分でもなぜ泣いているのか分からないのだ。初めてそんな体験をしたのは、シェイクスピアのマイナー作品『ペリクリーズ』。家族と生き別れて苦勞してきたヒロインの台詞でぐっときた。最近では、言わずとしれた名作、テネシー・ウィリアムズの『ガラスの動物園』。主人公トムが、終盤、姉ローラを回想する台詞で、不意に何かがこみあげてきて、いきなり嗚咽してしまったのだ。そして、最後のあの有名な台詞「その口ウソクを吹き消してくれ、ローラ」で大泣きである。なんとも不思議な感覚で、同時にすごいカタルシスがあった。声にするという体験、その身体性のパワーを強く思い知らされた体験だった。

恩田 陸

ONDA Riku

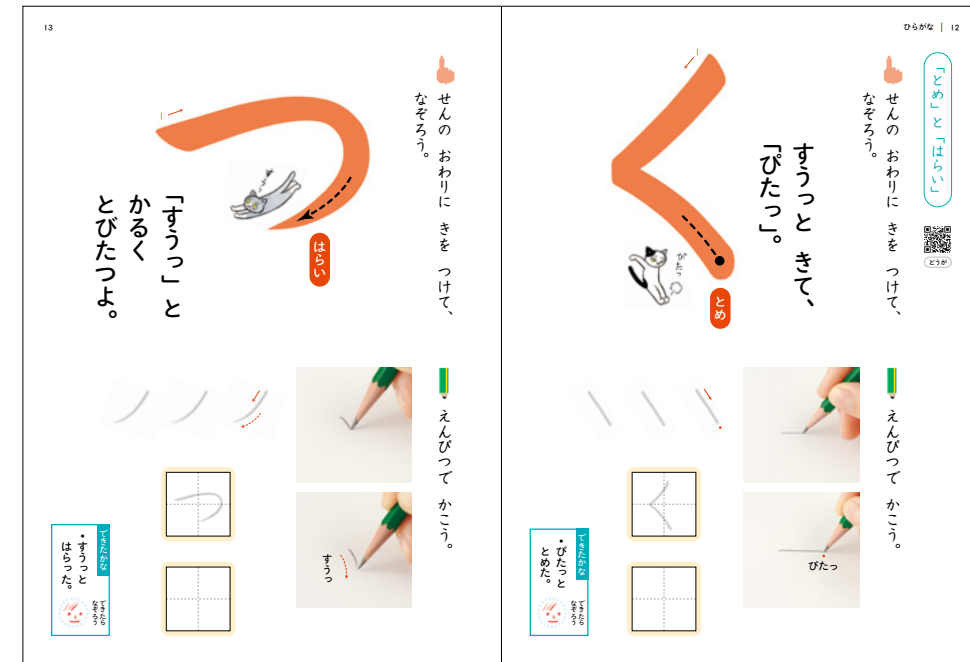
1964年宮城県生まれ。1992年、『六番目の小夜子』(新潮社)でデビュー。
2005年『夜のピクニック』(新潮社)で第26回吉川英治文学新人賞と第2回本屋大賞、
2006年『ユージニア』(KADOKAWA)で日本推理作家協会賞、2007年『中庭の出来事』(新潮社)で山本周五郎賞、
2017年『蜜蜂と遠雷』(幻冬舎)で直木賞と第14回本屋大賞を受賞。

教科書の中の“からだと言葉”

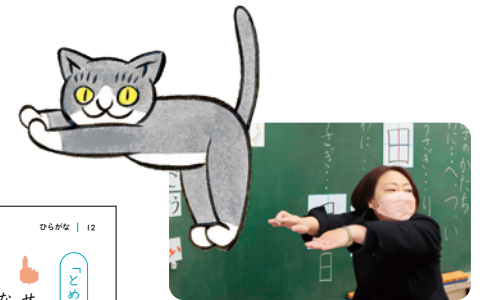
からだと言葉を行き来しながら学ぶ場は、教科書の中にもさまざまに位置づけられています。ここではその一部をご紹介します。



小学校書写「擬音語」と「猫の動き」



小学校書写教科書 1年p.12-13



書写の教科書では、点や画を書くときの「とめ」「はらい」「はね」などの筆使いを、「びたっ」「ぐるうり」などの擬音語と猫の動きで表現しています。「すうっときて、『びたっ』！」と声に出したり、自分でからだを動かして猫の動きをまねしたりすることで、筆使いを直感的に感じ、理解できるようにしています。

小学校道徳「感じよう いのち」



小学校道徳教科書『きみが いちばん ひかるとき』1年p.45

小学校道徳教科書『きみが いちばん ひかるとき』6年p.147

「感じよう いのち」は、「生命の尊さ」を扱う教材と組み合わせ、各学年に1か所ずつ設けているページです。授業で考えた「生命の尊さ」が、実感と結び付くことで、子どもたちの中で確かなものになるようにと考えました。五感を使ったり、からだを動かしたりして、「生きている」ことを実感できるようにしています。



気象予報士としての知識や経験をもとに、天気や自然現象を表す言葉にうつし出される人々の感性や文化、ものの見方・考え方などを紹介していきます。

第3回 天気という言葉の今昔 ——「劇薬」と「情緒」

気象庁は、今年の春、最高気温が40℃以上となる日を新しく「酷暑日」と決めました。一般公募のアンケートで断トツの1位に選ばれたこの言葉は、もともとは民間の気象法人が使い始め、世間に浸透していったものです。かつては未知の領域だった40℃という数字が、今や毎年のように国内のどこかで観測されるようになりました。日本の夏は気候変動によって、その姿を急速に変えつつあるようです。

こうした自然の大きな変化は、私たち気象予報士が日々の予報で用いる言葉をも変えていきました。2000年代以降の天気予報を振り返るだけでも、ゲリラ豪雨、猛暑日、災害級の暑さ、地球沸騰化、線状降水帯といった言葉がまたたく間に定着しました。「ゲリラ」という言葉は、本来は奇襲攻撃を意味する軍事用語であり、使うときにはためらいがあります。しかし、言葉がもつ圧倒的なイ

ンパクトと、一瞬で危機感を共有できる機能性に、私たちは時として頼らざるをえないのです。

さらに近年では、気象庁の発信もさま変わりしました。災害の危険が迫るときには「命を守る行動を」と強く呼びかけ、2019年の東日本台風接近時には「(台風の)接近とともに世界が変わる」という、文学的ともいえる強い表現で警鐘を鳴らしました。非常にセンセーショナルな、いわば「言葉の劇薬」です。そしてその劇薬さえも、日常的に浴び続けることで徐々に効き目を失い、さらなる強い表現へと変化しているように思えてなりません。

その一方で、気候の変化に置いていかれ、消え去ろうとしている言葉に思いが至ります。たとえば「夕立」という言葉を、私は天気予報の現場でめっきり使わなくなっていました。現代の夏の雨は、かつてのように涼風をもたらす優しさはなく、激しく一気に道路を冠水させるような凶器へと変貌したからです。危険を回避する情報を届けるために、風流な言葉は捨てざるをえ

ないのです。松尾芭蕉が詠んだ「五月雨をあつめて早し最上川」という名句。ここには大雨に対する自然への畏怖がありながらも、どこかみずみずしい風情が漂っています。しかし、線状降水帯などによる「牙をむく大雨」の前に、私たちは「五月雨」という言葉を使う折さえ奪われてしまいました。

ここ数年は特に、新たに生まれる言葉の切実さと、失われていく言葉の余韻を強く感じるようになりました。技術の進歩によって災害を未然に防げるようになった現代だからこそ、予報にはより強い警告の言葉が求められます。気象予報士としては寂しい限りですが、風情ある言葉はきっと文学や芸術、記憶の中で生き続けていくのでしょう。

長谷部 愛 HASEBE Ai

気象予報士、東京造形大学非常勤講師。1981年神奈川県生まれ。信州大学教育学部卒業。テレビ・ラジオ局員として、番組制作・キャスター・リポーターを経験後、2012年に気象予報士資格を取得。翌年からTBSラジオ、Yahoo!天気・災害動画などに出演。2018年から東京造形大学で教鞭を執る。著書に、『天気とよみとく名画』(中央公論新社)など。



歌川広重『東海道五拾三次 庄野・白雨』

日本語と英語の 行間で考える

幼少期より日本語と英語を使い分けながら、それぞれの表現やコミュニケーションについて考えてきたニキさんの視点で、これらの魅力や ままならなさをポップにライトにつづります。

第3回

「話せばわかる」こと ばかりじゃない

岡山城の近くを流れる旭川では桃のボートに乗れるらしい。ピンク色の真ん丸な桃をかたどったボートで水上散歩する様子は絵になっていて、SNSでもたびたび話題になる。大きな桃に乗って「どんぶらこ〜どんぶらこ〜」とつづやきながらボートをこぐなんて楽しそう。今度、岡山に遊びに行ってみようかしら。

旭川には桃以外にも、白鳥やタンチョウのボートもあるそうで、ネットで読んだある人の情報によると、外国人観光客のほとんどが桃ではなく鳥のボートを選ぶそう。確かに、桃太郎をまったく知らない外国人からしたら、なぜ川に大きな桃が浮かんでいるのか、ピンと来る人はほとんどいないだろう。

桃太郎という文脈が共有されていないから、感動も喜びも共有されない。「日本には『桃太郎』という有名なおとぎ話があってね……」といちから説明することはできても、相手は「理解」はできるだろうが、それが「感動」や「共感」につながる可能性は低いだろう。

通訳をしていると、こういう「前提となる文化的な文脈が共有されていない」事態に直面することはよくある。これこそ技術とセンスが試される瞬間だ。できるだけわかりやすく、しかし事実を曲げずに、時にはユーモアを混ぜたりしながら一生懸命に説明しても、「ふーん、日本人はそういうのが好きなんだ」という、他人事のような反応しか返ってこない場合もある。そういうときは最低限の情報共有さえできていれば、相手の「共感」を諦めることも大事だと、私は思う。

もちろん「桃から生まれた男の子！ それはおもしろい！」と好奇心で反応してくれる人もあるが、やや



イラスト：水沢石鯨

インテリじみた相手だと「桃太郎は日本人にとってのヒーロー像なのか？ 桃から人が生まれる描写は神道に基づくアニミズムの表れなのか、それとも仏教の輪廻を表現しているのか？」と分析を求められてタジタジになることも。いずれにせよ、「理解」がないところに「共感」はなかなか生まれない、というのが、数々の異文化コミュニケーションを経て私が悟ったことだ。

桃太郎が知られていない文化圏で「大きな桃の物語」といえば、イギリスの小説家のロアルド・ダールの *James and the Giant Peach* を思い浮かべる人が多いだろう(和訳版は『おぼけ桃の冒険』など)。巨大な魔法の桃の中に潜り込む少年と7匹の虫たちの奇想天外な冒険譚で、英語圏の小学校には必ず置いてあるといっているほど有名な作品だが、日本では映画版を含め、知名度は低い。

私自身、幼少期に『桃太郎』を読み聞かせてもらい、小学生になってダールの作品をいくつも読んだ身として、英語で“giant peach”と聞けばジェームスを思い出し、日本語で「大きな桃が」と聞けば「どんぶらこ」とコールアンドレスポンスするだろう。

両方わかる立場として、わからない人にどこまで「わかって」もらいたいのか。どこまで共有されれば「わかり合えた」ことになるのか。考えが行き詰まりそうになったときは、「桃ってピンクでかわいい」の気持ちだけ共有されれば、満足できるようになりたい。

キニマンス塚本ニキ Nikki TSUKAMOTO KININMONTH

通訳・翻訳家・ラジオパーソナリティ。1985年東京都生まれ。9歳から23歳までニュージーランドで暮らし、オークランド大学で社会学・ジェンダー学・映像学などを学ぶ。日本に帰国後、フリーの通訳・翻訳者として国内外の社会課題の啓発や対話の現場に携わる。TBSラジオ「荻上チキ・Session」やYouTubeチャンネル「ポリタスTV」などのレギュラー出演、雑誌コラムを通して発信中。著書に『世界をちょっとよくするために知っておきたい英語100』(Gakken)がある。

第2回

小さきものの魔力

福田尚代

美術家

幼い頃は、一人で裏庭へ抜け出しては地面に座り込み、白木蓮の樹の下から木漏れ日を見上げたり、蟻の巣穴を覗き込んだりしていた。つねに視界いっぱいに散らばる細かなもの——砂粒、おしろい花やほうせんかの種、貝殻や陶器のかけら、うつろう光の斑点、色彩の粒、そして、母が布団をたたき音とともに欄干からキラキラ舞い降りてくる塵——それらをただひたすらに見つめていた。見飽きることがなかった。

文字を読み始めたのは幼稚園に通い出した三歳の頃。瞳に映る言葉の連なりが、頭の中にふわりと色やかたちを生み出す不思議さ。踊るようなわたしの心の動き一つ一つと結びついてゆく楽しさ。ひらがなの組み合わせが少し変わるだけで、色もかたちも心さえも万華鏡のごとく変化する。わたしはたちまち本を読むことに夢中になった。

小学校に上がると、図書室でたくさんの本を知った。まず、壁一面を占める本棚に驚かされ、ずらりと並ぶ背表紙の文字に胸が高鳴る。本棚を仰ぎ見て、題名を目で追う至福の時間。安心して眺めるうちに、隣り合う本と本の境が揺らぎ、題名と題名が繋がり、言葉と言葉の出合いが空中にぼうっと未知の景色を浮かばせる。試しに本の位置をそっと入れ替えると景色も変わる。言葉のわずかな移動がもたらす穏やかな変容。誰も知らない不思議な魔法かもしれない息をひそめる。書物の森は静かで奥深く、無数の景色の層を秘めていた。

ようやく一冊の本を選んで表紙を開く。幼年期に地面を見下ろしたように、ページの上に目を落とす。見開きいっぱいにぎっしりと活字が並んでいる。それらの文字には、いつか裏庭で見た花の種と同じく、小さきものの魔力が宿っていた。幼い日、おしろい花の黒い種子の中に、真っ白な粉が詰まっていることを知って驚嘆した。以来、あの黒くて硬い粒を探し集めることが喜びとなった。ページに挟まれた言葉の一粒一粒にも、世界の真っ白な秘密が潜んでいるという予感があった。

年々、手に取る本が小さくなり、本の中の文字の密度が増していった。少しずつ読み出した文庫本も、幼い日のわたしが種子を隠した宝石箱のように、細かな黒い文字であふれている。微細な文字をゆっくりと目でなぞるうちに、わたし自身も芥子粒ほどに小さくなって、いつしか活字の細い線の上を歩き始めた。

こうして、活字の小道をたどる巡礼にも似た長い時間が過ぎていった。足元には植物が生い茂り、曲がり角で立ち止まって見渡せば、美しい光景がどこまでもずっと続いている。これから何が起ころうと、本を読めば再びこの場所に帰ってくることができる。それは、果てしなく続く言葉への絶対的な信頼。わたしをつくったものとは、こうした言葉のちからではなかったか。紆余曲折を経て、今、わたしは美術家としての道を歩んでいる。ふり返ってみると、言葉が見せてくれた無限の景色こそが、わたしの美術の輝く源流だった。

福田尚代

FUKUDA Naoyo

1967年埼玉県生まれ。1992年東京藝術大学大学院修了。1994年から2000年まで、アメリカ滞在。現在、埼玉県在住。本や文房具、郵便物などを用いた彫刻やオブジェ、コラージュを手がける。美術の制作と並行して、回文の詩作も手がけ、発表を続けている。主な著書に『ひかり埃のきみ』『あわいのほとりのひとり』(以上、平凡社)がある。



イラスト：日下 明

「言葉の時代」は終わらない。

心を伝える。感性が豊かに響く。理性をしっかり構築する。

AIの主人となる。国境を、人種を、文化を、軽々と超えていく。

すべては、言葉が成し遂げる。「生きる」のふもとに言葉がある。

私たちは、光村。言葉の力を紡ぐ者。

力ある言葉を、あらゆる面から追究し、届け、

それがまた次の世代へと受け継がれるようにと願って、

終わることのない言葉の時代を切り拓いていく。

英語の授業にフォーカスしたAIアプリ！



アバターが授業の
アシスタントティーチャーに！

TOC-ME!の特徴

- 1 アシスタントティーチャーとして
Small Talkができます
- 2 時間がかかる**Speaking Test**の
評価やアドバイスも**AI**にお任せ
- 3 さらに音読課題も**トクミー**が
自動で採点アドバイス



詳しくはこちら➡



まずは
無料で体験！



光村図書ウェブサイト

光村図書

検索



小・中・高等学校
教科書訂正のお知らせ



光村図書
LINE公式アカウント
友だち募集中！



とことば
tokotoba

3号

2026年10月9日発行

発行者 ● 吉田直樹

発行所 ● 光村図書出版株式会社

〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9

電話 ● 03-3493-2111

www.mitsumura-tosho.co.jp

デザイン ● 深山貴世 (ZONOCO)

印刷所 ● 協和オフセット印刷株式会社

個人情報の取り扱いに関しては、弊社「個人情報保護方針」に
則り、適切な管理・保護に努めてまいります。
詳しくは、光村図書ウェブサイトをご覧ください。

教育情報誌に関するお問い合わせ先
住所変更・配送停止 ▶ ej1@mitsumura-tosho.co.jp
ご意見・ご感想 ▶ koho@mitsumura-tosho.co.jp

